
タイトル未定

練馬治

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

タイトル未定

【Nコード】

N5284B

【作者名】

練馬治

【あらすじ】

ある小説家が執筆した原稿用紙。そのタイトル欄にはなぜか「タイトル未定」と書かれてありました。担当者と小説家のある日のSSです。

タイトル未定

(前書き)

決してふざけた《タイトル》ではありません。この「タイトル未定」こそが、この物語のれっきとした《タイトル》です。

タイトル未定

何百枚という原稿の一枚目。そのタイトル欄には「タイトル未定」と書かれていた。

三十代後半。まだまだ若さに負けていないと自負する小説家は、担当者の呼び出しで書斎から居間へと「タイトル未定」を持っていった。

生憎、今日がその原稿の締め切り。

小説家は、頭を大雑把に掻きながらもその用紙の束をテーブルに置いた。

「先生……。その『タイトル未定』というのは、一体どういう事でしょうか？」

「おいおい。本気でこれがタイトルだと思っているのか？ 恋愛小説だぞ」

「それは存知してます。私が言いたいのは、まだタイトルが決まっていなかつたという事だけです」

担当者の女性は本文の確認作業すらせず、小説家の隣で「タイトル未定」という文字をひたすら凝視していた。

小説家よりかなり年下の若い彼女は、最近彼の担当になったばかりの人だ。

結構な美人なのだが、根はしつかりとした真面目な性格であり、小説家曰く「ちょっと根を切ればきつと完璧な女性になるだろう」と言われたことがある。

しかし、そんな事はまるで無関心の彼女は、すべき仕事の為に視線をタイトルから本文へと移した。

「とはいえ、本文は結構な推敲をなさっていますね」

「そうだろ？ 小説は出だしが命だからね。これでも相当苦労したんだよ」

彼女の言う通り、一枚目の原稿は二本線で消された部分が大多数を占めており、推敲の何よりの証拠となる。しかし、肝心のタイトル部分に関してはキレイな一度書きで終わっていた。

「担当者さん。本当にタイトルって難しいよね」。何度も何度も考えているんだけど《コレだ!》というタイトルが、どうしても浮かばないんだ」

煙草をくわえた小説家は、向かいの庭をぼんやりと眺めながら火を付ける。その表情も相当悩んでいるように見えて、少々だらしない。

そんな小説家に彼女は、きっぱりと言った。

「先生。私が言うのもなんですが、タイトルというのはその場の勢いで決まる事じゃないでしょうか？ いつまでも考えていては、きっと良いタイトルは浮かんでこないでしょう」

小説家が大きく息を吐くと、瞬間マンガの吹き出しのような煙が舞っていく。

「それはダメだ。個人的には、推敲してこそタイトルだと思っているよ。君は俳句家の松尾芭蕉の事を知っているかい？」

唐突な質問に彼女は一瞬間が緩んでしまうが、すぐに引き締める。「……ええ、存じています。江戸時代に『奥の細道』などの名作を出した俳句家の事ですが……それが何か？」

「芭蕉は後世に残る名句を数々、世に残した事は知っているな？ 実を言うと、ほとんどの名句は度重なる推敲によって、完成させたものらしいんだ。例えば『五月雨の降りのごしてや光堂』の名句だつて、当初は『五月雨や年々降りて五百たび』という内容を推敲して改作させた句なんだよ」

文学好きの彼女は、もちろん芭蕉の名句くらいはよく知っている。しかし、それで納得するはずもなかった。

「失礼ですが先生。確かに俳句と小説は同じ文字から表現していきけど、結局それはお門違いではないでしょうか？ 私には関係のない事だと思っております」

目を鋭くさせた担当者は、それがなんだと言わんばかりに語気を強めて言ったが、小説家は別段驚いた素振りは見せず、ゆっくりと煙草を灰皿で潰す。

「関係あるよ。俳句というのは短い文字の中に、様々な感情が積まれている言葉なんだ。たかが十七字。されど十七字。そこには作者の感性が所狭しとあって、僕たちに少しづつ伝わっていくんだ。

まるで水を限界まで吸ったスポンジに、自然と水が垂れていくようにね」

そのまま小説家は担当者に目を合わせていく。

「だからタイトルだって同じ事。何十万字という内容をたった少しの文字でまとめてこそ、本当のタイトルだと思うんだ。だから僕は、もう少し考える時間が欲しいな」

小説家の視線の先にいる彼女は、何も言葉を返すことができなかった。

今日が締め切りだというのに、この人はギリギリまでタイトルを必死で考えている。そんな頑張っている姿に、真面目な担当者は簡単に裏切りたくはなかった。

少しの沈黙が流れた後、彼女はついに折れた。

「先生の言いたいことはよく分かりました。考えてみれば、大ヒット作品の九十パーセントはタイトルで決まると言いますしね……。推敲も大事だと、改めて認識しました。先程の失言は、申し訳ございません……」

「いいよいいよ。そんな気にする事でもないし、君の意見だって完全に否定はできない。そうだ、これから久しぶりに散歩にでも出かけてみるよ。もしかしたら、その時に良いタイトルが思いつくかもしれないからさ」

小説家の口から煙臭さがなくなった頃。当の本人は玄関で地味な

スニーカーを履いていた。

隣には担当者の女性。すでに原稿の束は書斎に戻しており、明日、再び取りに行くという約束を取り付けていた。

家の鍵もちゃんと閉め、外の日射しに目を瞑りながら小説家は言う。

「こういった太陽の眩しさでも、何かキツカケを掴めるかもしれないね。街の風景、季節の花も然り。今日はわざわざ来てくれて、本当にありがとう。必ず明日には決めておくよ」

「お願いします」

そうして、二人は別々の方向へと歩を進めていった。

「ふう。明日には必ず出すとは言うてくれたけど、今日だけは編集長にどんな言い訳をしたらいいんだろう……？」

出版社までの帰り道。

担当者は、ひたすら上司に対しての口実をじっくりと考えていた。

「やれやれ、なんとか騙し通せたけど、あの子に『まだ、ラストシーンだけ完成してない』なんて言える訳ないから……。今日は徹夜して何とか仕上げなくっちゃ……」

家から家までの散歩道。

小説家は、ひたすらラストシーンのプロットをじっくりと練り直していた。

ちなみに、タイトルに関しては特に問題ない。

確定的なタイトルは、すでに小説家の心の中にインプットされているのだから。

(後書き)

未熟者の作品を読んで頂き、本当にありがとうございました。

2500字以内を目標に書いた作品ですので、どうしても削らなければいけない箇所もありましたが、何とか執筆できて良かったと思っています。

また、この作品の参考文献として、

「マンガ日本の古典『奥の細道』」(矢口高雄 著)「中公文庫」の本を参考にさせて頂きました。

ご感想、ご評価は次回作への活力に繋がります。

タイトル未定

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連は横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5284b/>

タイトル未定

2008年11月7日08時15分発行